第二十五回「心の花賞」発表

第二十五回「心の花賞」受賞作品

金有美「韓の血の」
小林賢太「水瞑抄」

賞＝賞状および『佐佐木信綱全歌集』

選者賞

佐佐木頼綱賞　増田満美子「野茉莉」
大口玲子賞　小峰圭子「テキストにない」
駒田晶子賞　松本実穂「空と鳥」
高山邦男賞　福崎亨子「聖五月」
田中拓也賞　花美月「七つ下がりの雨が止まない」

選考委員（選者）

佐佐木頼綱、大口玲子、駒田晶子、高山邦男、田中拓也

選考経過

①応募総数　一〇三
②佐佐木頼綱、大口玲子、駒田晶子、高山邦男、田中拓也の各選者が十編を選んで投票。票の入った四十一編を予選通過作とした。その中から三編を選んで投票し、得票のあった八編を一次選考通過作（○印）とした。さらに、各選者が二編に投票。得票の多かった金作、福崎作、小林作を二次選考通過作（◎印）とした。最終選考会議は八月三日にＺｏｏｍにより開催。その結果、金有美「韓の血の」と小林賢太「水瞑抄」の二作品を心の花賞受賞作に決定した。

予選通過作

雨雨雨汰　念仏を唱える
◎金有美　韓の血の
山口昭恵　ハンセンの詩（うた）
鈴木香代子　北穂高岳
西野國陽　無題
森みやこ　るりるらん
◎福崎亨子　聖五月
新留紀代美　そろそろの時
久松洋一　マイヒストリー
長谷川静枝　わが懐しき歌
蓬田真弓　見えないだけで
○小峰圭子　テキストにない
荒井公子　遍路といはむ
齋賀万智　わたしの一日
青山仁　腥い
川又和志　留まる麒麟
片山佳代子　過去進行形
森祐希子　せめて命を
関沢由紀子　さびてゆく声
鬼束美佐子　合図
秦千依　地球のトゲトゲ
髙鸞石　辺境
谷ちえみ　父の墾（ひら）きし
塚本瑞江　あばよの桜
笠巻睦　また坂のぼる
福永昭子　テンセグリティ
○松本実穂　空と鳥
○増田満美子　野茉莉
○花美月　七つ下がりの雨が止まない
星野さいくる　Audibleで「1Q84」を聞きながら
志水千登世　履歴
内田さやか　シンバルの鳴る日
山本枝里子　火のことば
◎小林賢太　水瞑抄
しおせとくや　春の啓示
伊藤亜佐里　ひりひり
○深尾早央里　四十路を笑ふな
神戸貴雅　縮みし何か
大塚亜希　読みながら
十亀弘史　土に探す
奥村知世　【至急】の会議

韓の血の●金有美

「例のあの国」と呼ばるる教室にその祖国もつわれとわが子と
生徒らに起こる笑いのさざめきの明るくてうそ寒き教室
揺らがざる水面と思う面伏せて唇ひき結ぶ少年の眼は
北窓のひかり静かに降りそそぐ少年の手の記す文字の上
触るることためらいながらわが産みしこの魂と真向かいており
吾子までの距離をはかりてとまどえるわれを映せる鏡面静か
ここよりは触れてはならぬ　立ち止まり気配濃きこのほとりに黙す
君の手に触れたし　はるか幼日の手をとるごとく空引き寄せる
曇天の下確固たる正しさに領事館たつ中へ踏み入る
僅かなる緊張もちて記しゆく本名というは淋しかりけり
おのが子の兵役義務の免除なる知らせ自国語なれば読めずに
在外国民二世のスタンプ捺されあるパスポートもち吾子は生きゆく
屈折を超えここに立つ少年の眼の光ほのかに揺らぐ
陽のなかに輪郭細くむすびつつわが少年の自我ゆらめけり
わが依怙を負わせたりしか日本に馴染まぬ名もて生きゆくことも
生き難き名と知りながら名づけたる子らの名前を愛す、ひたすら
まぎれなく我らのうちに流れいる血をおそれおり韓のこの血を
母語を愛し生き居るからに立ちつくすわが静脈に灰の混じり込む
かの国のそよ風の音を聴くごとくこの風聴けばはつかに苦し
自問幾たび繰り返すのみ韓の血の流るる身体持て余しては

受賞の言葉――金有美

この度は、心の花賞を賜りましてありがとうございます。一報をいただきました時、そばには娘と息子がおりました。子供たちは一緒になって喜んでくれ、娘は私を抱きしめてくれました。長い間の目標であった心の花賞をいただけましたこと、いまだに実感が湧きません。

私は日本で生まれましたが国籍は韓国で、在日韓国人三世です。韓国語は話すことができず、日本語のみで生きております。短歌との出会い、それはまた、自己と言葉との抱える矛盾との出会いでもありました。しかし私はこれからも日本語を愛し、短歌を作り続けていこうと思います。改めまして心より感謝申し上げます。

水瞑抄●小林賢太

微睡める三人四人（みたりよたり）の落ちにけり諸行無常の春の三限
ファンデーション光れる頬をさらしつつ最前列に青年眠る
若きらの輝き満つる講義室レジュメの隅の先帝入水
宝剣はわたつみ深くしづみけり尖れるものは身のうちふかく
清経は二十一にて亡じたりスマホあやつる二十一にて
天井の蛍光灯は間引かれて廊うす暗き国立大学
出生数七十万を割りぬらし渡り廊下の錆いよよ濃し
締め切りは近し科研費報告書過程ではなく成果書くべし
ドーナツの上に滲める粉ざたう少年の日はあはくなりゆく
熱湯を注ぐ一瞬ふくらみてあとは滴り落ちるコーヒー
手さぐりにもつれをほぐす夕まぐれ羊歯の新葉に春の雨ふる
もののふの家集に並ぶ恋うたのやさしき微熱　木蓮ひらく
ひとすぢの罅あらはれぬみじかうたひとつこの世の声にいだせば
ひとけなき朝の落花の公園にどこにも駆けてゆけない木馬
寡黙なる欅の大樹ゆつくりと風に揺れたり　あれはうなづき
みなかみに鳥の国あらむ錫色の羽のひとひら川面を流る
万象は海へゆくらむ笹舟の運ばれゆくをしばし見てをり
深海の底よりみればこの街は波もとどかぬ世界の果たて
ひとときの反抗として水切りの石は川面を跳ねて奔りつ
敦盛の討たれし春のせせらぎの水草（みくさ）の陰におたまじやくしは

受賞の言葉――小林賢太

この度は素晴らしい賞を賜り、深く御礼申し上げます。佐佐木頼綱先生、選考委員の皆様、本当にありがとうございました。多くの刺激をくださった短歌の仲間たちにも心より感謝いたします。

これまで中世の私家集を軸に、和歌の研究をしてきました。よく古典和歌と近現代短歌は性質が異なると言われます。確かにそうなのですが、歌の配列に工夫を凝らし、ひとつの世界を立ち上げようとする姿勢は通じ合うように思います。

今回じっくり連作と向き合うことで、連作の魅力を再認識するとともに、中世歌人たちの歌の営みを僅かばかりですが追体験できたような気もします。今後もいっそう作歌に励んでまいります。

野茉莉●増田満美子

真夜中に激しく降りし雨はもう地中深くへ潜りしころか
苛立ちは奥へ奥へと隠されて作り笑ひの面のごはごは
野薊のむらさきいろに導かれ扉を開くはつなつの森
山肌を雲が駆けゆく　触れるものすべてを拒み続けるあざみ
渓谷のぬかるむ道にいく度も踏みつけられて野茉莉の花は
鎮もれるダンジョンのやうな杉林　三光鳥の尾羽ゆらめく
欄干を覆ひ尽くせる苔たちの命のやはらかきに触れたり
流れゆく水の音しか聞こえない世界にわが耳だけを残して
迸る水はわたしの体内の水と共鳴するといふこと
ほそく強く水の落ちるを見てをればやがて真白き龍と成りたり
存在を声で伝へて大瑠璃は葉擦れの奥に姿を見せず
いつか地に落ちる未来を知らないで高き梢にささめく花よ
新緑に透ける小さく白い花風に舞へるを手で受け止めて
寄り添へる柳苺のこどもたち葉裏でじつと口を噤みぬ
そのうちに溶けてなくなる銀竜草　迷ひは誰にも伝へられずに
抽斗の奥に仕舞いし日記には消せない文字の重なり合ひぬ
許し得ぬ言葉の羅列思ひ切り川へ投げれば海に消ゆるか
直感は確信になる　雉鳩が羽ばたきを止め風に乗るとき
太陽のひかり届けば輝いて憧憬へ戻る樹々のしずくは
日常を断ち切る鋏などなくて靴裏のゑごそつと剥がしぬ

テキストにない●小峰圭子

長廊下コット押しゆく女のいて母なる道を歩みはじめぬ
乳やればオキシトシンに導かれどうにかこうにか子を育てたり
「ひっぱると千切れそうだな」産科医は忘れただろうそんな一言
拍動の止まりし胎児産みしかば臍の緒ももに冷たく触れつ
立ち合いはめでたき儀式さむざむと死児を産むとき女はひとり
血の巡りとじて幾つの春すぎてわがまなかいに秋桜揺れて
はとすずめせきれいからす噴水に集う命のひとつかわたし
鶺鴒がととんとととん叩く地のはるけきときは空が知るべし
楓の木のおおき葉っぱを拾いたり長き手紙を君に書きたし
ベランダに咲き継ぐ花の花殻を拾いて埋める洞ひとつ持つ
蹴破り戸越えて聞こゆる声のあり孤立が産んだぎざぎざの声
表札をあげない扉が「コ」の文字にならぶ夕暮れ魔界はどこだ
若き日に登りし山の稜線をなぞれば海へ落ちゆくなだり
「俺は七つの海をわたった男だぞ」父は商人、酔えばかなしき
亡妹とまたがりしかな渡るべきものとし海を見し父の背
二度と戸を開くことなき古家に呼ばれてひらくGoogleマップ
冬枯れの蔦のからまる廃屋の家族の歴史、誰も知らない
昭和元年あなたも私もいなかった昭和一〇〇年あなたがいない
ベランダで日日草が冬を越しテキストにない生き方をする
永遠につかぬ既読を待っている雲の割れ間に空が見えるよ

空と鳥●松本実穂

窓の外をときをり鳥の影ながれ冬深くなるひと日を籠る
雪の野をわが知らざれば雪の野へ堕ちゆく鳥のゆくへも知らず
わが町に千七百年を座す古墳春立てば春の鳥よ鳴くべし
ひもすがら細かい雨のふりつづき空の重さが窓に来てゐる
キャリー型酸素吸入器たづさへてきみはしはじむ空の話を
肉のない尻だと椅子に座るのもつらいんだよと海を見る目に
立ちどまる人につられて立ちどまる生きあはせたるこの狭き道
慎重に避けてきたりし〈ぐわんばれ〉が口ゆ飛び出づ手までをふりて
海岸に流れつきたる流木は人にも木にもなれず横たふ
全裸にて看護師たちを驚かせし人の哀しき痩躯をおもふ
焚かれゐし流木のわが背丈なれば全方位より海鳴りのする
明けゆける空を雲雀は貫けり春のひと日がこの世に残る
あをぞらは風葬の墓　人は人と刹那まじはり風にさらさる
見てゐしはつきぬけるほど青き空　爆ぜて落ちくる鳥のひたすら
永遠と旅の途中は同意語でさみどりの風連れてゆくなり
砂浜に砂紋の生(あ)るるひとところやうやくわかるやさしさのあり
鳩の群れちらしてのぼりゆく少年　古墳の丘に時間はかしぐ
鳥影が一瞬わたしを横切つてさうだね反芻するのはやめよう
ひとり聴く草生をわたる風の音ゆきてかへらぬ者を思へり
春の陽は風のやみたるしづけさにあたためをらん花野の石を

聖五月●福崎享子

始まりの四月の光まとひつつ子どもらが来る夕べの塾に
保健室、教室、図書館それぞれの居場所あること　五月の緑蔭
ベトナム語ペルー語の「ありがたう」教へてね国語は日本語だけぢやないから
クリスチャンならねど塾の交流会に子らとくぐれり教会の門を
先生と見れば生徒なり風ぬける老若男女の多国籍ひろば
聖堂にみ言葉は読まれ唱はれぬ遥かな高みをいくどもめざし
幼き日隣家の居間に見てをりき荒野にいのる幼な子イエス
小さき路地を囲む七軒の低き家　十歳まで吾を育てくれし場処
向ひ家の引き扉はいつも開かれて信仰ふかき夫婦が住みき
はす向ひのお姉さんに連れられて原つぱ横切る日曜のあさは
牧師さんの語りし長島愛生園ま近く遠く癩を思ひぬき
そにどりの青き衣をまとひたるバックヤードのシスターの影
マグダラのマリアのごとく若く美しサンピエトロ寺院ピエタの聖母
死がありて継ぐ生のある「教皇（ヘパムス・パパス）を得た」遅々としてなほ前へ進むべし
「子どもたちに平和を」の幟この年も五月二十日の「平和行進」
夢の島「第五福竜丸展示館」ゆ八月六日の広島までを
カメムシもイナゴもヒトもドローンも群れで来るときひとつの灰色
花をよぶ風、風をよぶ歌、歌をよぶ雨、雨をよぶ花十薬
傷負ひしマララ・ユスフザイ、カマラ・ハリス、グレタ・トゥンベリ息災にあれ
清廉なる連山のごとアカタテハルリタテハ地に羽を立てたり

七つ下がりの雨が止まない●花美月

ゆふぐれに遠く鳴神　本家とは竈と厠の神のゐる場所
外にある汲み取り式の御手洗(みたらひ)に八十二銀行の暦が下がる
桑の葉を裏返しつつ来る風よ戦ぐテープにびつしりと蝿
中二階は蚕部屋なり人の指ほどの太さがうねり寄せ来る
ムッとくる青くささはも千匹のお蚕様の息なれば吸ふ
蚕婦の首覆ひたるスカーフのほつれを潜る四ノ三(しのさん)の針
夜がくれば隙間なく星　蓼科山(たてしな)の稜線黒くくつきり見ゆる
海なしの県に海瀬と呼ぶ地名　海へのあくがれ強し古人に
梟がほうほうと眉毛数へたり数へ終はるとその人は死ぬ
孫ひ孫大から極小まで揃へ大往生の枕、蕎麦殻
代々の本家の右手(めて)が磨きたるボンボン時計に付喪神(つくもがみ)をり
古き家(や)を田の字田の字にしきりたる襖外せば五十畳の間
ふるまひは鯉のあらひと鯉こくで信濃の舌はよく骨を出す
わたしにも信濃人の血　県の歌「信濃の国」を五番まで歌ふ
墓の草引けば鬚根の先つぽに顔を知らない翁(おきな)や媼(おうな)
父死して本家が遠くなりにけり舫ひの舟でありしか亡父は
墓仕舞ひしてもう祖父母をらぬ墓　この先われは登らない山
「もう二度とない」と思へばうからとぶ分け合ふ涙ひこばえに垂る
振り向いてはならぬ坂あり祈つてはならぬ祠に都豆良藤(つづらふぢ)の実
あを柿のはだへをしんと濡らしゆく七つ下がりの雨が止まない

四十路を笑ふな●深尾早央里

探せども書かれてをらず聖書にはおのれの母を敬ふ訳を
兄妹と輪を作つては寝る前に聖書を読んだ服従として
《ナルニア》の世界に行きたかつたけど母の仲間に見張られてゐて
ちらちらと母の隠部を盗み視る中学生のわたしの目玉
春の夜に罪の子として生きていく十六歳で聖書を棄てた
誕生日ケーキを欲し泣いてゐる四十路を笑ふな、笑ふな、笑ふな
みことばが喉につかへて幾春も母への思慕は言葉にならず
ピュアなまま四十六で死んだ母その吐瀉物を浴びて育つた
死別して二十年経つ夢のなか母に刃を三回向けた
耳奥の血潮の渦がうるさくて楽園は来ない夢の中でも
かえってはこない時間を待ちわびてわたしがだんだん固まってゆく
こめかみの奥で会話をしていたかあなたの顔がはっきり見えた
もういない「わたし」にいつか会うために何度も洗う首筋までも
二十八、二十五、十七、十一日　月命日のまた一日（ひとひ）増ゆ
夢に会う人たちのみな越えゆかん時鳥鳴く彼方の空を

新留紀代美

そろそろの時

白鳥は銀河こぼれる夜に発つ　今、軽やかに鳴き交わしつつ
一万人にひとりの病（やまい）　秋田だと九十人はいるということ
この部屋のテレビ、本棚、カレンダー、写真、パソコン　要らなくなる日
見えている今を如何に生きるのかザンザと雨はザンザと降って
何事にも終わりがあるということのひとつに過ぎぬ　光もいのちも

蓬田真弓

見えないだけで

青山仁
腥い

爬虫類両生類と顔立ちを変えて胎児は人になりたり
爬虫類の腥さ俺も持っていたその顔立ちをしていた頃は
俺だって多分あったさ血と汗と体液激しく巡りし日々が
肉体の激しき内側大幅に収まっている　でも朝は来る
肉体の腥さを受け入れることそれを恋とか愛とか言うらし

塚本瑞江
あばよの桜

ふくらかな陽を吸い込んでふところに目白を抱き咲くさくらばな
こころある桜なればかゆく人の朝に百年の花を咲かせて
貝殻の記憶を持てる花花の波立つ空に重なりて咲く
散りしきる桜花びらいのちという安易重ねてながめておりぬ
さらさらかほとりほとりか雨の木の下桜散る音を聞く猫

福永昭子
テンセグリティ

いろはすを買うルーティーンいろはすを通って冷えた光が好きで
内ももはたぶんこのまま白いまま一生陽には当たらないまま
出口から手を振る人の輪郭を塗りつぶしていく白い逆光
平日のベッドのゾウのぬいぐるみゆるんで鼻がふふふのびてる
この雨で散った私もいるだろう花の筏のゆるく渦巻く

星野さいくる
Audible で「1Q84」を聞きながら

明日には開くと紅を覗かせてナガミヒナゲシ春越えてゆく
紫陽花と肩を寄せ合い抜けてゆく路地の向こうの友の借家へ
黙禱は濃い闇を生む十本の指の間(あわい)と閉じた瞼に
陽光に色を奪われ額縁の中の昭和の輪郭に触る
二時間を頬杖のまま喪失し向かいの椅子を夕暮れが飲む

神戸貴雅

縮みし何か

ぼんぼりのオレンジだけが浮きたちぬ　音無き雨の桜並木に
人のすまぬビル屋上の廃園に忘れつつじの咲き誇りけり
コンクリやアスファルトにもよく似合う鯰の腹に似た梅雨空は
水溜りの雨の波紋はにぎやかに祭花火の最後のように
電動の身長計がはじき出す去年より縮みし我の何かを

雨雨雨汰

念仏を唱える

五月雨に打たれるゴールデン街の飲み屋の窓に百均のサンタ
舌、打ちを遮断するためイヤホンのままで乗込む東京メトロ
意、志もなく「ガザ解放」の演説を訝る巨大なネコの真下で
色、っぽい加工でゆがんだ顔をしたヲンナの並ぶ看板ばかり
香、水の百ミリグラムがひと月の食費とおなじ伊勢丹にいる

山口昭恵

ハンセンの詩（うた）

厚壁の小さき穴より覗き見る大空青く青く広がる
生（あ）れしままの裸のままで瓶に眠る吾子は五十歳（ごじゅう）をとうに越えおり
シリコンの指は冷たしぽつぽつと指一本に叩くパソコン
ハンセンに体の自由は失えど人間らしさは忘れずに生き
極寒の重監房の壁の文字生きる望みのこころの叫び

鈴木香代子

北穂高岳

湿りある森林限界こえて立つからりと夏の独立峰われは
人ならば決して目立たぬ男なりしかれども男　北穂高岳
あるときは雪の香すずしく目覚めたり北穂高晩秋厚き胸板に
夏に逢い秋にも逢いし君を恋うシリウス冴える冬の窓辺に
死の谷は君のうしろにふかく落つ眩暈しずめてひたすら君へ

西野國陽
無題

子を連れて桜のかげに原爆の記念碑訪ひし松山公園
原爆の落下中心地をしめし屹立しけるくろき石柱
「核兵器は罪」と語りしフランシスコ奇跡のごとく土砂降り晴れて
ノーベル賞たたふる声は多けれど核廃絶のうごきは鈍し
終戦後八十年を迎へれどガザ、ウクライナに空襲絶えず

森みやこ
るりるらん

揺れてます言葉の揺り籠るりるらん消え行くものを抱きしめてます
ざら紙です戦後のバイエルざらっざら時代に流され乾いてゆきます
出来ますか耳の取り換え補聴器の拾えぬ音に溺れそうです
お願いです揚羽蝶（あげは）のような休止符に逸る心を包んで下さい
大好きです真っ青な空るりるらら何も持たない何も待たない

久松洋一
マイヒストリー

小三の我の手ぶれやピンぼけの王選手六十年後も笑いおり
投手大谷は打者大谷から三振を奪う術明日も考えている
百人の一人は毎年癌になる病（やまい）と主治医に告知されたり
弟と喧嘩の種になりしこともネス湖のネッシー元気でいるか
十九年振りの二十首投函す今年駄目でも来年がある

長谷川静枝
わが懐しき歌

紀元節「雲に聳ゆる高千穂の」合唱の声ひびく校庭
慰問袋を受けし二人の兵隊さん帰国し吾家で楽しく語る
「藍より青き大空を」落下傘より空を飛ぶ神兵と明るき曲にあこがれしなり
教育勅語拝聴のあと唱ふなり「あやに畏き皇（すめらぎ）の大御心に答へまつらむ」
「見よ東海の空あけて」唱ひし頃を思ひつつ富士の見える丘に立ちたり

荒井公子

遍路といはむ

垂乳根の親のかたちをそのままに銀杏の葉つぱちまちま芽吹く
七回忌迎ふる父の追善に向かふ家路を遍路といはむ
西方へ向かふのぞみの車窓より街に野山に桜もよぎる
両の手を蜜柑の色に染めあげて冬のあいだを食べつづけし日
ながながと鳴く音ひびかすほととぎす多摩丘陵の谷戸に木隠れ

齋賀万智

わたしの一日

ママ、マンマ　寝ぼけ眼にマの音を自在に使う君は一歳
バイバイと家に手を振る君はもう残されるものの寂しさを知る
ラジオからいじめのニュース大人とは子どもの時に死ななかった人
被害者になりし生徒の母親がきつく握った青いハンカチ
子育てをしつつ働く「私たち」「たち」はそれぞれ顔のある人

川又和志

留まる麒麟

鎖などなかったはずの公園におとこふたりと石榴の花と
出会った頃の話はどれも楽しくて波打ち際も嫌いじゃなかった
どこでどう間違ったのか折りかけのツルを開いて折り目をならす
信じたり信じられたりする二人ポッカレモンは檸檬じゃなくて
この世での呼び方さえもわからない男でも女でもない麒麟

片山佳代子

過去進行形

ケイドロの陣地は樹齢百十年のケヤキ　木陰にドロあつまりぬ
追いかける追い付かれるを幸せとまだ知らなくてケイドロたちは
実習の二週目　子らの名もかおも完璧だったこれからだった
ひと夏のスイミーよ、ケイドロたちよ　人生は一秒も待たない
永眠のわれは数えているだろうきみの過去進行形のなみだを

森祐希子

せめて命を

颱風で港も家も壊れし島まず復興は養殖池から
どの人も刺繍針持ち身を屈む笑顔も音もなき作業場に
枯れ葉剤は葉より滴り川に入り魚はその水を泳ぐほかなく
烏賊釣りを見ており夜目にもぬめっこき身をくねらせて烏賊釣られおり
食べるなら自ら捌かんまずはこの烏賊三杯を流水に洗う

関沢由紀子

さびてゆく声

声は今日も嫌がつてゐるセイレーンを気取りて歌ひし日々など忘れ
丸太からはみ出たねじが海風に晒されさらされさびてゐるねじ
さびていく私の声　私の心もさびていくのだらうか
弟は同性愛であることを声を絞りてかつて言ひけり
大丈夫と答へてしまふ癖ありてつかへる声でダイジヤウブと言ふ

鬼束美佐子

合図

二階より国見ができる家に住む　青年神武が暮らした近所
死が二人を分かつまでならもう「上がり」なのかな榊の水を替えつつ
五十日を過ぎれば家の守神になるそうのんびり死んでいられない
つるつるの赤いボタンの押し心地残る右手に猫なでており
燃えてゆく　治ってきたねと撫でていた喉（のみど）の深い手術の傷も

秦千依

地球のトゲトゲ

まっすぐに伸びられぬ枝を切り落とすむかし庭師に習ったとおり
生きていてごめんなさいという女子の弁当の蓋をコンコンとせり
いた、見てた、知ってた人は記入せよ　摘芯されていく嘘の花
「この件は預かります」と言われれば自由になれたような気もする
睡眠を渇望する我沈みゆく春の大三角形の底

高鸞石　辺境

潟湖(ラグーン)の蜻蛉(せいれい)の羽澄みきって楽譜のごとき黒き線見ゆ
捨てられし漁師の古き箪笥より旗あふれだす夕暮れの丘
われの持つただ一本の包丁にて鯨の肉をゆっくりと切る
墓場のほかに逃げる場所なし辺境に生きるわれらの避難訓練
放火魔を突き止めんとしわが家に羆(ひぐま)のごとき駐在が来る

谷ちえみ　父の墾(ひら)きし

ターミナルケア　ついぞしっくり来ぬひびきパン食せざりし父の一生に
痛みからようやく解かれし膝は伸びずやや傾げやり棺に納む
畑と畑わけて草の葉なびきおり丈高きほど風に打たれて
一枚の日向なる一ヘクタール父の墾(ひら)きし一ヘクタール
もう何も語ってくれず長い詩を読みかえすごと父を思えり

笠巻睦　また坂のぼる

五十三なまなま女の我がいて絹漉しほどにやわき乳房(ちちふさ)
肉厚の珊瑚樹トマトを湯剥きしてすき焼きしようすっぱく甘く
終わり近き体の奥にも欲はあり男の大き耳を見ている
梓弓春のスタバに降るさくらフラペチーノのバニラが重い
柘榴坂しんどいねぇと言い合って道に迷ってまた坂のぼる

志水千登世　履歴

担当者会議の介護職員の席は末席よく入れ替わる
メイさんのベットメイクの清しさよ客室清掃経験活きる
言い訳をせずに解雇を受け入れた真面目な人に残るイレズミ
検食を一人暮らしの子に譲る部長は時に母の顔になる
それぞれが歩いた道に桜から「がんばりました」のスタンプが降る

内田さやか

シンバルの鳴る日

よけいなことばかりをしては笑ってるこの子はどんな大人になるのか
増えてゆくかけ算よりもなっちゃんはみんなでわけるわり算が好き
馬ならば逃げ足速いは褒め言葉生きのびるため子ら馬になれ
長ければ長くなるほど追いつけた長距離走のように人生もきっと
叱られてばかりの少年のシンバルが最上段で響き渡る日

山本枝里子

火のことば

ひまはりの明るさゆゑにみえぬもの密かに殻を脱いでゆく蛇
はつなつのトマトはうれしさうに照る無理して赤くならなくていい
日日ニュースみてゐるまなこが〈戦前〉と認知しさうでまなぶたを閉づ
誰に何いはれてもちつとも気にしないひとねと言はれつきつめぬまま
ふところの深き山里おとづれて鳴かぬ螢を脳裏にしまふ

しおせとくや

春の啓示

風を孕むスケートボーダー板をもて地を打ち春を呼び覚ますなり
春近し日向に小さき自転車が転び小さき人間が泣く
石仏の削れし顔もよみがえる闇の夜なり梅林の紅
みなそこに潜りゆきたり春昼の陽のさすなかを泳ぐ真鯉は
あかときの部屋に光の芽を吹きてスマートフォンのアラームが鳴る

伊藤亜佐里

ひりひり

「How are you?」に「I'm fine」と返事するクラスみんなでみんなが返す
小数点以下どこまでも続いてく端数は切り捨て解答とする
先生のお話を聞く膝かかえ口をつぐんだ「ん」の形で
夕空がひりひり焼ける明日まで歩いていくにはどうしたらいい
そのドアは電停ごとに開かれる新しい風を携えながら

大塚亜希
読みながら

看板を読みながらゆく旅先の「生そば」の文字にいつも躓く
軽いもの、薄くて淡い色、灯り　すべてlightである慕わしさ
有限な時間は今日も読書とかくしゃみだとかに削られてゆく
読めるものはみな文学で取扱説明書の禁忌事項もどこか可笑しい

十亀弘史
土に探す

五階建て三棟百戸中庭に桜一本つましき団地
花粉症なのか生垣抜けて来て二度もぶしゃりとくしゃみする猫
配管がむき出しにある浴室に鏡一枚歯ブラシ二本
建替えを告げられてからどの家も大きなごみを大胆に出す
高層に替えられたなら低層の優しい記憶を土に探そう

奥村知世
【至急】の会議

どんどんと薄着になってゆくオフィス本音が少し見えやすくなる
裏地だけ一番高い生地選ぶように見舞いの品を選んだ
上座には一番強く日が当たるブラインド閉めそびれた会議
退院をした日に桜は開花して部長はマスクで挨拶をする
パソコンで見える部長のスケジュール昼休みには【至急】の会議

第二十五回「心の花賞」選後評

三十一音の射程●佐佐木頼綱

短歌の魅力のひとつは、作中主体の生活を描きながら、その背後に歴史や社会を映し出すことができる点にあるのだと思う。百篇を超える心の花諸兄の連作に圧倒されつつ、あらためてその力を感じた。

第25回心の花賞は小林賢太「水瞑抄」と金有美「韓の血の」の同時受賞となった。

「水瞑抄」は日常と古典が交錯し、「韓の血の」は民族的記憶と身体の痛みを直視する。両作を並べて読むことで、三十一音の射程の広さが際立つ。

「水瞑抄」は大学を舞台にしている。

・若きらの輝き満つる講義室レジュメの隅の先帝入水　　小林　賢太

若者の輝き、青春の無邪気さのただなかに「先帝入水」、わずか八歳で亡くなった安徳天皇の記憶を差し込み、歴史の影を浮かび上がらせる。

・清経は二十一にて亡じたりスマホあやつる二十一にて

夭折した平家の公達と、現代にスマホを操る大学生とが「二十一歳」で結ばれる。はかない生の時間が、時代を超えて歌に凝縮されている。

「ファンデーション光れる頬」「科研費報告書」といった現代の細部を軽やかに描きながら、歴史の文脈を借りて無常観や青春と死の近さを響かせる。和歌研究者ならではの美学が詰まった連作である。

一方、金有美の「韓の血の」は民族の歴史を直接的に背負い込む。

・まぎれなく我らのうちに流れいる血をおそれおり韓のこの血を　　金　有美

個の身体を超えて「我ら」の共同体を形づくる血の流れ。それを背負って現在を生き、次世代に継承せざるをえない切実さが伝わる。小林の歌が「はかなさ」に向かうのに対し、金の歌は「痛み」に向かう。そしてその痛みは「私」から「われら」へと拡張していく。民族の歴史を刻み続ける〈痛みの証言〉として、独自の価値をもっている。どちらの作品も、短歌が個人的な抒情を超えて歴史や社会とつながる可能性を示している。

選者賞には大いに悩みつつ、自然を舞台に内面の揺らぎを静かに描く増田満美子「野茉莉」を選んだ。

・渓谷のぬかるむ道にいく度も踏みつけられて野茉莉の花は　　増田満美子

・ほそく強く水の落ちるを見てをればやがて真白き龍と成りたり

小さな花や水滴が象徴的に詠まれ、自画像や内心の迷いが自然のかたちを通じて映し出される。いわば「小ささ」「おとなしさ」

「弱さ」が生命感へと転換している点に魅力がある。他の候補作が描く都市やトラウマを背景にした激しい表現に大いに惹かれつつ、それとは別の、内なる抵抗としての静謐を評価したいと思い選んだ。

最後まで読ませる力●大口玲子

金有美「韓の血の」は、自らのルーツ、名前、言葉という個人の存在に直結するテーマに真っ直ぐに向き合おうとする姿勢、そこから生まれる迫力が際立っており、立ち止まらずにはいられなかった。熱量を持って二十首が展開し、最後まで読ませる力がずば抜けていた。タイトルは直截に過ぎると感じたが、「血」を意識せざるを得ない日常を強いられていることを中心に据えようとする覚悟の表明と受けとめた。後半、「確固たる正しさに領事館たつ」「兵役義務」など個人の前に立ちはだかる制度を表す言葉が印象的。朝鮮半島にルーツを持つ人の先行作品と類似点があるかもしれないという意見も出たが、制度の軋みや偏見が続く限り、今後も同じモチーフの歌は新たな表現で繰り返し詠まれていくのだろう。

小林賢太「水瞑抄」は、「平家物語」の時代と現代を往還しつつ、まったく違う時代を生きながらもどこか共通する若者たちの脆さや危うさが浮かび上がる巧みな一連。「ファンデーション光れる頬」「レジュメの隅の先帝入水」という講義室の細部に加えて、「蛍光灯は間引かれて廊うす暗き」「出生数七十万を割りぬらし」と活力を失って停滞する今の日本社会の空気がにじむところに現実味がある。古典文学の世界に閉じこもらず、現代社会を見据える視点を持ち合わせている点に注目した。「入水」「わたつみ」「雨」「川面」「深海」と繰り返し現れる水のイメージが、若者たちの繊細さと響き合いながら一連を統べてタイトルの静謐さに収斂される構成が見事。

小峰圭子「テキストにない」は、心身に深く刻まれた死産の経験を、歳月を経てなお克明に詠んだ冒頭の作品に引き込まれる。母となること・母であることの本質を探りつつ、作者の母ははっきりと登場していないようだ。一連に漂う喪失感の一方、「父」「亡妹」をはじめとするすでにこの世を去ったひとりひとりの家族が確かに生きた時間が作品に刻まれている。「蹴破り戸」「表札をあげない扉」「永遠につかぬ既読」など、現代的な素材がアクセントとして効いている。そして「テキストにない」というタイトルが印象深く含蓄がある。冒頭の一首に「母なる道を歩みはじめ」た女が登場するが、誰もが母や子という役割を生きつつ、役割を超えた「テキストにない」オリジナルな何かを探しているのかもしれない。

福崎亨子「聖五月」、内田さやか「シンバルの鳴る日」、志水千登世「履歴」は、それぞれにたくさんの人物が登場する連作。三作共に、さまざまな背景を持つ人たちの共生の現場が詠まれている。目の前の現実だけではなく社会の構造にも目を向けた「聖五月」、子どもたちを尊重し励ます作者の姿が心をうつ「シンバルの鳴る日」、介護施設の人たちのつながりの確かさを詠む「履歴」、それぞれに魅力的な三作品だった。

鬼束美佐子「合図」は、配偶者の死とその後の生活を独自の視点で詠んで異色の存在感。悲しみとも孤独ともいえない不思議な感情と静かに続く日常が淡々と詠まれている。髙橋秀「父倒れたり」は、九十二歳の父を自宅で介護する日々、現実の生々しさをそのまま伝える一連に圧倒された。

最高到達点を探す●駒田晶子

今年度の「心の花賞」は、お二人の同時受賞となった。金有美「韓の血の」は、お子さんとの関係性を再確認し、作者自身のテーマが今までより深く掘り出されるカタチとなった。「在外国民二世のスタンプ捺されあるパスポートもち吾子は生きゆく」「まぎれなく我らのうちに流れいる血をおそれおり韓のこの血を」自分一人だけではなく子を思うことにより、血の存在がリアルに伝わってくる。自分の輪郭は、自分以外の人によって確認できるものなのだ、と改めて実感させられた。小林賢太「水瞑抄」は、作者の日常と社会と平家物語などを絡めた力作。「ファンデーション光れる頬をさらしつつ最前列に青年眠る」「手さぐりにもつれをほぐす夕まぐれ羊歯の新葉に春の雨ふる」「敦盛の討たれし春のせせらぎの水草の陰におたまじやくしは」生命の光と影を通奏低音として響かせ、確かな技巧で作者の身めぐりを連作に浮かび上がらせた。選者賞は松本実穂「空と鳥」に。「立ちどまる人につられて立ちどまる生きあはせたるこの狭き道」「明けゆける空を雲雀は貫けり春のひと日がこの世に残る」この春に亡くなった奥田亡羊さんへの挽歌として一連を読んだ。孤独と、喪失と、あたたかさと。ヒリヒリするような今までの作者の美学や矜持が、親しい人の人生の終わりを見つめることにより、静謐な抽象画のようにまとめられた力作と思う。山口昭恵「ハンセンの詩」。ハンセン病に罹患し、ふるさとを出て、富士山のもとに暮らして七十年。記憶と現状と。「生れしままの裸のままで瓶に眠る吾子は五十歳をとうに越えおり」。令和七年に、この連作を読めたこと、大切に思う。福崎亨子「聖五月」は、塾講師の日常から現代社会を感じ、幼い頃に接した信仰心を回想する。「向ひ家の引き扉はいつも開かれて信仰ふかき夫婦が住みき」。小峰圭子「テキストにない」は、生命と家族との記憶。「立ち合いはめでたき儀式さむざむと死児を産むとき女はひとり」。二十首に入れる登場人物数が多かったかもしれない。以下、出来る限りコメントを。深尾早央里「四十路を笑ふな」は、母と己と宗教の関係を叩きつけるように詠わざるを得ない作者の人生を読み、背すじが伸びた。久松洋一「マイヒストリー」は、詞書を挟みながら軽快に自分史が重ねられ、読み応えがあった。谷ちえみ「父の墾きし」は、父の死により広がる故郷と父の記憶。定型から、はみ出さざるを得ない感情が印象的だった。笠巻睦「また坂のぼる」は、人生の半ばを過ぎての恋模様のナマな体感に魅力を感じた。花美月「七つ下がりの雨が止まない」の巧さに唸った。しおせとくや「春の啓示」は、比喩が巧みで、構成が多彩。一首ずつ読み応えがあった。伊藤亜佐里「ひりひり」は、画一的な学校教育現場を切り取り、簡単に答えは出せないから、読んでいて苦しかった。十亀弘史「土に探す」は、数詞の使い方を効かせていた。選者全員で「心の花賞」に応募してくださった作者それぞれの最高到達点を確かめ合う、そんな選考時間でした。

第25回「心の花賞」選後評●高山邦男

初めて心の花賞の選考に加わり、なかなか大変な作業であると思い知った。百を超える応募作それぞれに込められた狙いや思いがあり、読み応えがあった。

まず、受賞した小林賢太「水瞑抄」は平家物語を下敷きにしたイメージを巧みに操るなど、上句と下句に絶妙なバランスがあ

り、詩的飛躍を楽しめる作品。

・宝剣はわたつみ深くしづみけり尖れるものは身のうちふかく

・清経は二十一にて亡じたりスマホあやつる二十一にて

・もののふの家集に並ぶ恋うたのやさしき微熱　木蓮ひらく

一首目、壇ノ浦に沈んだ宝剣のイメージを「尖れるもの」と普遍化し「身のうちふかく」としたときに、自分の身のうちのようでもあり、海の中のようでもあり独特な詩的イメージが生まれた。二首目、二つの二十一歳を並列することで、物語の哀しみと存在の危うさが漂ってくる。三首目、暗喩的に働いている木蓮と微熱という情感が絶妙な取り合わせを成している。

次に同時受賞となった金有美「韓の血の」はタイトルの通り在日韓国人として日本という国で生きる生き辛さを歌ったもの。

・わが依怙を負わせたりしか日本に馴染まぬ名もて生きゆくことも

・まぎれなく我らのうちに流れいる血をおそれおり韓のこの血を

在日の問題は昔から続いてきたことだが、自己の存在の根幹や、自分の選択が子にも影響が及ぶという世代を越えた問題として捉えられている。それが丁寧に実感を持って歌われていて内容が深い。

選考会の議論は小林賢太作品は完成度が高く優れた技巧があるが、短歌の価値はそれだけではなく、金有美作品にはそれに匹敵する内容があるという事で、長い議論の末、両者同時受賞で決着を見た。

私が選者賞に選んだ福崎亨子「聖五月」も事前の推薦で票が多かった作品。

・保健室、教室、図書館それぞれの居場所あること　五月の緑蔭

・先生と見れば生徒なり風ぬける老若男女の多国籍ひろば

・傷負ひしマララ・ユスフザイ、カマラ・ハリス、グレタ・トゥンベリ息災にあれ

最近の○○ファーストという社会風潮の中でリベラルな雰囲気が自然に表現出来ていていい作品だと思った。声高に自分の政治主張を述べるわけではなく例えば三首目の「息災にあれ」というように優しく願うことで思いを伝えている所がいい。

・誕生日ケーキを欲し泣いてゐる四十路を笑ふな、笑ふな、笑ふな

・ピュアなまま四十六で死んだ母その吐瀉物を浴びて育つた

深尾早央里「四十路を笑ふな」はインパクトという点では一番印象に残った作品。様々な視点を取り入れていけば更によい連作になるだろう。その他、山口昭恵「ハンセンの詩(うた)」、十亀弘史「土に探す」、齋賀万智「わたしの一日」等、印象に残る作品が多々ある選考になった。

タイトルの力●田中拓也

第二十五回「心の花賞」受賞作は金有美「韓の血の」と小林賢太「水瞑抄」の二作品に決定した。

・「例のあの国」と呼ばるる教室にその祖国もつわれとわが子と　金　有美

・生き難き名と知りながら名づけたる子らの名前を愛す、ひたすら

・まぎれなく我らのうちに流れいる血をおそれおり韓のこの血を

金はこれまでにも自身の出自を主題とする連作を「心の花」誌上や「心の花賞」で発表していたが、今回の作品は「われ」と「子」の関係性を軸に、自身の生き方を力強く詠んでいる点が他作品を圧倒していた。

・ファンデーション光れる頬をさらしつつ最前列に青年眠る　小林　賢太

・若きらの輝き満つる講義室レジュメの隅
　の先帝入水
・出生数七十万を割りぬらし渡り廊下の錆
　いよよ濃し
　小林は『平家物語』の中で描かれた若者たちと現代の学生たちの生き方を対比させる中で、時代を超えた作品世界を構築しようとする挑戦的な試みが一際強い光彩を放っていた。
　両作品とも短歌史の中では近似する主題を詠んでいる歌人の先行作品はあるが、それらを踏まえつつ独自の作品世界を追求している点が評価され、同時受賞となった。
　今回、選者賞に選んだのは、花美月「七つ下がりの雨が止まない」である。
・ゆふぐれに遠く鳴神　本家とは竈と厠の
　神のゐる場所　　花　美月
・外にある汲み取り式の御手洗（みたらし）に八十二銀
　行の暦が下がる
・あを柿のはだへをしんと濡らしゆく七つ
　下がりの雨が止まない
「父」の生家である「本家」との有形無形の繋がりを独自のタッチで描いた作品世界が深く心に残った。作品を読めば一目瞭然であるが、細かな描写力に確かな表現力を感じる力作である。
　この他、他の選考委員の選者賞に選ばれているが、増田満美子「野茉莉」も注目した連作であった。
・渓谷のぬかるむ道にいく度も踏みつけら
　れて野茉莉の花は　　増田満美子
・鎮もれるダンジョンのやうな杉林　三光
　鳥の尾羽ゆらめく
・そのうちに溶けてなくなる銀竜草　迷ひ
　は誰にも伝へられずに
　自然詠が困難な時代にあえて自然の世界を丁寧に描写することを通して、独自の作品世界を構築しようとする姿勢におおいに注目した。
　以下、予選通過作品の中で特に注目した作品を抄出した。いずれも、主題を意識した力のある作品と思う。
・もういない「わたし」にいつか会うため
　に何度も洗う首筋までも　新留紀代美
・見えている今を如何に生きるのかザンザ
　と雨はザンザと降って　　蓬田　真弓
・俺だって多分あったさ血と汗と体液激し
　く巡りし日々が　　青山　仁
・いろはすを買うルーティーンいろはすを
　通って冷えた光が好きで　福永　昭子
・二時間を頬杖のまま喪失し向かいの椅子
　を夕暮れが飲む　　星野さいくる
　今回、選考にあたって気づいた点を一点だけ述べておきたい。それは「タイトル」の力である。二十首連作は独立した作品を二十首並べれば完成するものではない。ひとつの物語性が求められるといってよいだろう。その時に連作のタイトルは大きな力となる。応募作を読んでいると、連作中の一首からタイトルをとっている例が多かったが、練り上げればさらによくなると思う例も少なくなかった。今回、受賞した「韓の血の」「水瞑抄」は、いずれも連作の一首一首を統べるとともに、ひとつの作品世界を提示するタイトルであった。選者賞の「七つ下がりの雨が止まない」も連作を引き立てる個性的なタイトルであったと思う。二十首連作は総合力の試される世界と思う。